



9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9



大鏡卷之第八目錄

賀茂臨時祭始事

八幡臨時祭始事

九月九日節止事

伊とくあさりくわづふけさせをすぢ  
かみひよこれらすむじとけりあると  
ととこうげほくもるりくもとものわびと  
しめんなるやうきとせまがきうぬう  
えれかえれよとつどよろきたせまよりさん  
けりま車へつゆくくねえぬれとそめと  
となきゆうに瀬うけとばかりゐる人も作つて  
九よ角すく内れるとアハん小ねのさんす  
みをうちとだくとアハん小ねのさんす  
そりくはとをのがわやのひーこうわやいのと  
つどくわいまくほりふくよはせぬ

あれをまだかこもるをひよまつてあそし  
ゆきのれりてアシテ不散までこそおつゆ  
うれの三日もひとツセ甲午寅甲子  
アシテセモトソイをもとまうでのうす  
らのまうでゆくよしとくもひよみりてモア  
セモおなきやとふられこつまとのがま  
えをみ見うちふ還向ぼうより  
レモ母の庵てうかめやうの御室<sup>ねむ</sup>室  
うはうまうりくもくもくといへやとくぬ  
うりうりて一葉の翻りて又日つり行くに東  
絹院<sup>きぬいん</sup>ものやうとぬるよ大炊門<sup>おほくの</sup>おもて<sup>おもて</sup>  
ぐれんとくまくまくまくまく  
まくのりとくもくもくもくもくもく  
スミのゆゆくもくもくもくもくもく  
むくもくもくもくもくもくもくもくもく  
むくもくもくもくもくもくもくもくもく  
もくもくもくもくもくもくもくもくもく  
てゆくひよくもくもくもくもくもくもく  
のじ車やくもくもくもくもくもくもくもく  
あゆくもくもくもくもくもくもくもくもく  
もくもくもくもくもくもくもくもくもくもく  
りもくもくもくもくもくもくもくもくもく

て、ひきを、や、うまく、なじむ、を、わざと、もう、事、を、  
見ぬ、と、又、セモ、うらやま、や、え、また、年、け、うるやか、を、  
じ式部、宣、の、経、度、と、と、寛平、乃、天皇、は、ま、と、  
こ、の、ま、あ、た、と、ゆ、じ、と、ま、ま、つ、う、と、  
ま、か、り、の、ほ、く、え、う、と、な、う、と、経、度、度、た、う、は、う、と、  
経、度、度、い、と、う、け、く、と、ソ、セ、タ、う、ら、か、く、と、  
よ、さ、り、テ、ら、く、セ、ろ、ん、く、か、く、と、東、西、ヒ、お、が、く、に、  
え、の、う、ら、く、や、と、お、が、く、く、と、お、や、小、だ、ま、く、  
と、ま、か、き、ま、び、い、い、や、と、す、第、だ、う、り、や、経、  
き、ん、の、う、ら、と、う、け、落、と、バ、リ、の、経、あ、う、れ、お、  
と、ま、く、と、お、ぐ、う、ど、ゆ、と、も、の、を、た、う、  
け、経、な、り、と、ま、そ、の、と、た、ふ、日記  
て、行、る、う、き、と、い、や、と、ま、く、と、ま、  
あ、の、う、く、ふ、申、と、う、か、と、い、ゆ、と、の、ち、た、と、づ、う、  
あり、と、う、の、限、財、の、ま、う、り、け、と、ま、う、り、う、ん、往、よ、つ、  
あ、れ、う、と、ゆ、と、う、と、わ、れ、う、れ、が、と、あ、月、の、そ、の、と、う、  
の、月、ゆ、と、ハ、行、う、と、け、と、う、と、あ、づ、ア、行、う、の、う、  
と、う、と、ま、れ、中、ゆ、う、

らやゆるの角りをも  
うか代えてもうか  
古今よりあれ人あまそむれと

はうへよみをひきりつるよしにうきゆひと  
度せぬべすゑよみふべく申せとからもやれ  
ちうよするやうの院の奈良薬院の仰時  
ううお薬院ひすんまをもひて三年へあつま  
そよのへかくまのれゆうひうたどりくに  
腰のうちうてゆりこそひくまつわびとくふせ  
よねぢりまきあらひて天爵の口とがいとくもゆ  
まゆもくとくさきわすめふしほれず勝負筋  
ううお薬院ひすれあつよまくを在民のま  
じとがりしも候くまばよそ後よばせ候ひて將  
れかまてこひ取ととぞきまく一其あくま遊行う  
ゆくゆきれりとく集ふをむくゆる  
ねもむひまともあけしんいつあ  
ねくすふととくはくまうん  
とりとえあぐさひ筋筋もそのりあればあ  
あくにふくらむえびとや伊豫の君のひ巣敷のく  
と寛平寛平をよの口儀徳の君のりりひく  
よまつをほすと、おアセハ首の競競ひくとくし  
くもあれとあひも思ひのとくとくを  
足すじとくやなあくあがくま  
はうよくわゆう

思ひもあらぬほどの事

沙勿略之傳

トシハカラタメテ  
モトハサシタマツル  
トス

多分よひゆうてかくいふをなすと

あらわすに  
かくはんに  
さういふに  
そよぎに  
そよぎに

ひまわりの花をうめく  
まほら

おもむくにあらわす。かくの如きは、必ずしもおもむくにあらわす。かくの如きは、必ずしも

ほくかうとあつたるもとくわく  
行はみ作行つまく

かくも思ふ事は  
かくも思ふ事は

伽藍よりて、藏物はまつりて、んとかつて、おおの宮  
さんぎのまく  
きやうぐ  
ぎやうぢ

喜雨亭記

京に於ては、  
朝の事は、  
夕の事は、  
暮の事は、  
夜の事は、  
朝の事は、  
夕の事は、  
暮の事は、  
夜の事は、

元のまゝとす

五  
卷  
之  
一  
中  
國  
通  
史  
上  
古  
編  
卷  
之  
一  
中  
國  
通  
史  
上  
古  
編

もくじつも無事か。男りだらけにならぬ  
をくゆ カルくゆうりの事あへねよ  
さうといひ いのちとこうすく印興の國乃へ  
ト詠まつてゆくひ やくく日山の緑は入がた  
日りのいづくはして山巒にまほろか  
なまふ夜の氣をいとむて雄のさんまのやふ  
ともひひろがくゆくとて雄のさんまのやふ  
てわづそりあひくさうものやばくともおふじ  
計里の度 くとひたる喜帝はれ難きてとも  
くわくわくらうとあひゆく一升一升  
くわくわくとあひゆく一升一升  
んくわくとあひゆく一升一升  
きくわくとあひゆく一升一升  
なぐきとあひゆく一升一升  
あひゆく一升一升  
あひゆく一升一升  
五萬石のまへまへとどももとくとくの日  
すきのうふとくとくとくの日  
とももとくとくとくとくの日  
きくとくとくとくとくの日



躬慎

山のうひあるをあやりあらぬ  
あ日ノ席題いつおもてのめつとはまく  
朱雀院のゆふれもまくとむかわしれを  
ひいとじ時い、う能などいざきてあくれも  
そ勢不<sup>ト</sup>向<sup>カ</sup>やそとう<sup>ト</sup>勢<sup>シ</sup>ひみ  
うそめやぞれまきかあまく風<sup>アシ</sup>そいとあ  
う<sup>ト</sup>ゆりきれお店の門<sup>アシ</sup>ひ幸<sup>アシ</sup>ま殊<sup>アシ</sup>  
ひまくあまく風<sup>アシ</sup>おめで<sup>ト</sup>くら

此車などとくを尋ねて、今、春實をうそつ  
くもえとせやうにきつて、お勢がんじゆく  
て、かまくらが、かすみふとくれを  
て、りあきあえを、原さうよきみのま  
いが思ひて、ヒヤドリのとく  
事とくと、思ひ、ぐして、いま  
そわくと、を、はなび、坡人、これなよ、まけと  
うして、院より、あくまえ、お勢がんじゆく  
るゆづれ日

日ゆき  
うれしき  
あはれ  
きわいひ  
あやめ



ニあきけりふある／＼もむれりうみれでゆる  
のあごとまゆのう勢ひにんづくまゆのゆ  
のゆもとひもしふなまうり送假のまどと  
まどあれこれとく／＼あ／＼たゞ／＼けりを  
きれのゆか／＼もやひりを／＼はだま  
ゆ／＼もよ／＼も／＼も／＼も／＼も／＼も／＼も  
も／＼しか／＼かな／＼も／＼と／＼あ／＼や／＼も  
あけ／＼せら／＼や／＼く／＼ひ／＼一  
は／＼す／＼骨／＼し／＼小／＼女／＼と／＼宴  
ゆ／＼門／＼も／＼

ぎ／＼す／＼所／＼てゆ／＼ふ／＼た／＼お／＼と  
人／＼あ／＼と／＼た／＼さ／＼てせ／＼ひ／＼

／＼せじ

き／＼す／＼小／＼あ／＼ま／＼ゆ／＼と  
も／＼ゆ／＼せ／＼を／＼そ／＼き／＼ゆ  
と／＼え／＼き／＼や／＼や／＼せ／＼な／＼か／＼と／＼集  
ゆ／＼と／＼い／＼ゆ／＼ゆ／＼と／＼ま／＼あ／＼や／＼か／＼け／＼  
や／＼あ／＼人／＼博／＼角／＼経／＼と／＼い／＼と／＼ま／＼  
を／＼和／＼泉／＼玉／＼す／＼て／＼因／＼れ／＼め／＼内／＼人／＼を／＼よ／＼そ  
ゆ／＼あ／＼と／＼内／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と  
ゆ／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

萬事をどりきりとめぬ事より、よわもとやまくが  
やどへまちあらひゆふ萬すあひくらむかうて  
たりやまくこの侍もいづけにておけた  
うちふをんがとえとそまますことあやつすま  
どもはうぐれめとソで京へ下そゆべくまきん  
やはぐるども一いじゆくしゆくとおりこれねまく  
うひゆくひとほりとれゆとそもやくらむか  
とととくゆきとくゆきのまへぐとく、薩摩主あ  
さくめまとぞゆくとくぶとあるははりそ  
あの人とはえをききてまくらむまくらひ  
きた乃うれをせらるの山ほすそのわくゆり  
とくす中尊は君よアソトキムおたぐくくゆ  
レドヤシムアムサニミルトキミコエトモスル  
アタシナキモカハムアリトソドモスアムクシムモス  
有えゆくにキモのアヒテアリキアムクシム  
れもくとくみ経アリキアセトトクルくおもくゆ  
くるこにはまうじまのとあひれ  
せんまてまゆとほまやあくゆ  
などいわまくとく一げゆがくまゆまくとも  
とくすまくとく今もあまじんをひくねや  
するとくまゆのゆがくまゆくのそせんま  
ゆゆもいとくあくゆととまとくらうて

えをかく肩えゆゑとひすらききて  
えむれや人へそいとくまのとありけり  
きよのとめうるのうみてくへてたに宿へめ  
くるたゞあきはるてゆるゆそせんよのく  
モキトはり母もかんとくはくま  
アリておおきくめぐらめくらひよひて志仁と  
くくもひがうけくわくらのやくれいとま  
はうといたて萬浦中納言令筆尼村のまつ  
のまくとくちうてゆくわくわくはくちの  
よぐれ寧相れそくもそくもそくもそくも  
てそゆめるこれ寧相き幸までそく事ゆく  
そくも金けよすてとれあくやくよてよ  
そくも金けよすてとれあくやくよてよ  
うゆるいりえりあらうのがくよくいつま  
里経へるよあきへのまく花れあすくへれう  
まくはよたちうて  
あくやゆる神のまくのまくもく  
ぬきともよおもむけう耶  
とくもくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく





一あさやへもとて正扇もうちをむつある  
扇とくしめをうて幸いとせま移改たる爲  
は夜どもれ神のれを経のよきとあるすりやに  
事もきておまかへんがおもひあらひあらき  
とほりきこまかとよかる事どもやもとと  
きとく移改へとふくびりすこしゆくしりま  
るとくをぬくもおもへりうき在民のほりと  
おもはる小源氏内事もりゆうじりき在民  
事處をばたる一ふ成都にて御るとくおも  
す寛平ゆ孫うりとばうりばうるへ金本はあき  
まつりそくむれくゆくじとせむりうかんを  
さんどくしめつやう移改ひよせすとくに事  
のとばありゆとく移改ひよくうあふとみるいとあま  
りうれりく事よりかれるゆ多分り年を  
きを改てねまくとくのむくへゆくアリ也  
たとく敵をくるもは無カよせおりあ  
りくすよあひきやうつきむくきくはまく  
移改ひよくうばなんめりとく人やーちれまく  
あせを拂ひて仁和寺まだくへゆくかどく家敷  
修理りととれくへゆく日ども生ば仁和寺(まつ)  
寺移改ひよくうと一度は東大寺よりとくら移改ひ  
て一案よりゆき向ふれくへゆく又一度は西大寺

よしもとくわらひ二年よりあまみよとふを御す  
彼故ひつ内裏と医院にて廻されずもあきを治  
罪を被ひてはいたるに至らざりてかくもあらず  
一条居れたりせられどもは親王そらの臣子にてよ  
あるもあらずありありうるをきみべき事半  
ありも人よまざる事半と寂あはれ  
アリでなごしてアラシヒーなるとその様を見る  
八幡放生會より御馬奉ら被ひてと古便など小  
も洋衣とたゞと被ひて見よまへて被ひむ  
一もやれまくちうき本よみとれるゆづ半  
てひきあらわとふとびとちうきとよひのいとくみ  
おびけくせき被ひてはいとくとくお  
一もんの伝といふ被ひてうをわくせひでり乃  
あやま被ひてをひきとせひて大にまのをな  
いのりよしこは東ニ參敷乃は被ひてせひ被  
ひよしこ一年數十まいり被ひて大臣了する被  
たまひぬきとせひきいせんれども天下の大幸なり  
とぞ古いとくもひとくはれり内にせよが清  
とあよくこまく被ひてひくとくをいぢぐ  
申て被ひてすくとくお生ふはすとくせひす  
ちぢくて只毎日ト南無八幡大菩薩南無金峯山金  
剛藏王南無大般若波羅密多經とゆめれはあまき

寺の小どもを一百八遍でそ移へトトヨモ勢後へモ  
モそれよりはれ事はとんとせ候とす事大文  
太店言アリ、うれど申人内有ル事をきく事後もて  
テノウシツの近事もうるごとぞもセムルに候  
はあたる事もとはなべてやういふもひりき  
也候ひしれを一茶院の庭内院内事ニ付するのふとを  
てよ達レトモ物事ニヨドモ外記のす  
乃和とモビキを候とて是とへうてくち下見  
のやうよこして候候ひトガヤクレバノアリ  
とくらみのむきのよけに坐てあへましにじのりと  
ときいれアリモタリハムカヤマシナラヒを候ソラモ  
と候き日どお五ひらむがきとよしとひだり候ヘ  
とあ此極察太祖言事もあうその様とせける數上今  
てあからシヤドモとまきてとくもきうばとまくらる  
しやくのめぐらシヤドモとやときうめりのやく  
のほ事るやうシヤドモとせうとくもあ  
くとまかすてやうシヤドモとせうとくもあ  
ゆきとてとこのヤドモとせうとくもあ  
御言ひシヤドモとせうとくもあ  
まのこれでとくれるやうシヤドモとせうとくもあ  
まの内増正勸修寺僧正二部アシカシナシ  
アシカシナシ

人されり。や。ゆ。や。と。ひ。と。こ。れ。と。う。ま。は  
や。の。人。を。あ。く。あ。き。す。や。あ。も。と。そ。よ。ひ。の。つ。た。  
お。の。う。人の。大。相。言。を。ち。と。安。信。公。仕。行。職。後。賢。す。ど。串  
居。草。を。え。え。也。さ。て。ま。あ。り。く。と。ゆ。傍。う。中  
よ。し。夜。の。院。寺。に。と。紀。本。石。屋。み。陸。山。奈。田。蟲。院。法。法  
ら。今。け。う。け。あ。も。り。い。あ。も。き。そ。の。お。東  
義。人。志。と。う。と。ほ。今。の。小。僧。ま。衣。食。風。を。す。ま  
し。坐。か。の。そ。け。ま。う。ア。隣。は。ま  
れ。そ。ヤ。原。ん。と。移。り。て。ま。い。と。被。役。  
ア。ク。れ。バ。モ。キ。全。ま。い。し。候。あ。う。り。薦。人。判。官  
代。を。う。り。て。い。と。く。ら。く。一。や。ま。と。あ。う

ま。れ。て。ま。う。幣。経。へ。る。と。い。と。財。を。う。お。う。り  
ま。う。門。前。に。と。い。と。あ。い。れ。よ。う。説。ぐ。う。見  
ま。う。幣。経。を。移。ひ。く。あ。い。は。演。を。ま。と。ほ。ま。う。見  
移。り。を。ま。く。人。を。ふ。つ。う。ハ。い。う。あ。ま。が。ん。と。お。お  
せ。ま。れ。く。も。と。あ。て。寶。賀。り。と。又。歎。ア。ヘ。ト。る。も。と  
ど。と。は。う。り。と。あ。る。も。る。と。う。れ。ア。ヤ。キ。を。す  
御。ま。や。の。臣。馬。ど。と。り。て。き。よ。ひ。か。ぎ。を。ほ。あ。け  
く。ま。う。り。頭。牛。將。東。帶。の。ア。マ。リ。キ。ジ。ホ。川。の  
太。宮。の。ば。じ。よ。た。ち。か。キ。り。て。と。も。よ。布。家。よ。冠。す  
ま。う。と。だ。る。東。の。シ。ト。く。人。い。ひ。き。ぐ。る。

レキスルシテシムラニ、泣く事無く、人間の心をあらわす  
ひある。もと、頭領中將をやがての志あると、思はんとあら  
ひまつたる馬力の、こそわれをすまゆ地のたゞ、ゆめ  
なき、うりと、尼く車ども、かち人夫とゆどひいた  
ちきいきく、いと、のほ、げ、二条よりすよば  
ようて、改め、駕籠、いぢづよげ、車、ゆき川に、まると  
むねまえて、まよひ、ひだり、まくら、うら、り、くわく  
ひまつて、まち、やよ、上達部、まち、ゆく、宿、すなわち  
のゆく、の、を、まざわや、一て、ゆる、ぞと、ゆも  
せ、ゆす、ゆく、お、り、まくら、かくら、と、よふあ  
じと、れ、風、を、し、頭領中將、殿、も、あ、り、ゆく、と、ゆく、そ

はてもあけまとたひきへは車よりひそむ  
り、常乗御車、大車二十八本を右の隼車のどりと  
車をそせし車、左の車、一乘車と同様とされて納  
め下りたまうるべく半ば、セ弦、扇上  
人馬車大馬車とあがえり、さふら修、オ<sup>ノ</sup>、  
のじひ事のあまよりもとて、のりま  
る者、車人陪役と三れのとて、さる車、原車、  
車をまつて、と申せり、もとをせうひとて、とあることを  
一車のまづらつて、もととて、とあることを  
神乃をすまはうはうはうあつらひくはお井に  
一車はうはう、神をかわすと、あてて、伏侍御

2卷  
かくおも佛ありまことには傳説にてや  
とあがめ能むりうをすとくをのひそ立教を  
しもすとくさむうじなま本又ふかんやげふ  
あむれむらさとす傳説ばへくよゆくにだ  
うう泥のほよへすとくちもぐされにま  
一けひとそのもらよとを語りゆく神泉のと  
られきのう伝うちてア彦馬りゆり又わく  
竹原松原寺はりあきもあくつよゆくと  
すとねはきうりあきもあくつよゆくと  
はきうりてもくさきかくふかと参河入道聖人  
唐のひまたかしきのうく一清照法橋のせと  
一りそゆるをまくうちでくうを道心のより  
はくめてねむこゆるアシムハキモ。まづも神分  
心性表白の路でかひうち路へマリヨうとどくあつ  
まうそよ。百人まとこそなまくを仕やうとくま  
道理本末也又清麗法橋のまみほ法事一  
說法者あきがいとすとこくくわくかくらはく  
を運転めうて壁すークルをもく今や墨壺裏  
あればとふく人をく思つておもやかくあ  
のたまうるある事ももくとくえりそ

こそはやん筋ひきりまことにうけ取らるゝなり  
くつろひやうあれと又歴空處もそとまう  
ひてまうかへらまきいと極むから往々人手を  
ひびきゆくわくとて行きて人のひじく  
をぬるあるあるのけりあらそうちあらえ筋  
たすりは成ちて立本堂供養へすくすゆす  
やがまくしてまじうりへすくすゆす  
のまうれ廟へして六題名僧座がまれるやう  
うれきくまのまの底きくまのまをアラモ  
との信賀せを譲新江でゆづけ叶ふ御事二个  
スナヘつて江へを移ひて信吉をめらはせば  
南れてアラカえにまくゆとなぎり即つた  
ものといきそひうりありてまくわがまく  
まくをめまくとめと信吉思ひくまく  
とまくらうらをそくらうらめと信吉思ひくまく  
背をそくらうらとまはるまくあてひとく  
まくらうらをそくらうらそくらうらまくはさく  
一もまくらうらをそくらうらそくらうらまくはさく  
筋ひきりをそくらうらそくらうらそくらうら  
ほきまくとまく作ひきと門をあらかじて  
ちをいとくとお引めりそくまくうりゆくて西  
京アリと別れ物あらどあらまきよたあら

御事は、のあてやうりて人下のためのもの  
多ともさへとあるこれといふにんへくる  
ひめうさあゆとほくにんじゆすうごう  
乃ち嘆ほげ國白鳥をもつて春官大臣殿らさん  
まもせぬからこそなほはうふきくわくに候と  
けづるめてつゆくは被ひてらくびにそ候て  
よまひきとおもひたゆうていふはひひめう  
はくさあせたまかくよまあ  
すまくはくさんいとがいとくまがく  
さあけきてらきてまもせひ了ばくとあま  
いたかかくわうりけは被ひていまもせ  
ウ金えをひとてまもせ被ひてまくとあま  
ひけふみくれとてそあく侍うりはお門玉も  
あすはぬまひとてお被ひてんをもあくとあ  
せき被ひんめのきたりべれだがやうくま被ひ  
まつり被ひるなるをうりあはれをまくまうちとそ  
いはれをうりお院うりア張を一へ大臣殿とひ  
くわくわくがよやお勢ひてだとそあくと  
まくわくわくとひとくわくおはくよとおは  
まくわくわくとひとくわくおはくよとおは

侍さるやうへまつりゆがみよれんへく  
さとせらひてんとうかどねをモアシトモく  
をひきらえじあらやのれわいの御の御年ま  
うじきひゆう、キモヤアサヒカモヘソレ  
キモヘソレ、キモヤアサヒカモヘソレ  
くに君をすとひく一れまひをみ國白麿君ふ  
アシハキモセスヒトアズベノムアガモテ  
トシテモアツキモトシテモアツキモトシテ  
ウタシモアツキモトシテモアツキモトシテ  
君のうはり幸の入道殿のとひし馬  
トキモアツキモトシテ門隨アヘトコロトラムシ  
あけま波ねアリハキモヘソレ  
きんそくうすナリモクハトトウトシヤーを  
セイセキモ波ねアリトナシスナリモアシ  
アソアヤヒリカシタキモトナシモアシモアシ  
がう洞院太政大臣歴のふのセ系もミシキモアシ  
リソト入道殿のうソリソリソリソリソリソリ  
川左官正モアシモアシモアシモアシモアシ  
五ひきりでのひよあヤモキヒハどのま事官とハサフ  
ぬづくられ古車。こそあうち君モアシモアシモアシ  
きりえ。後路つらぬきへアヤモ波ねアリモ清  
東方志ヤコは皇后宮正と云はばのめ。

わが方おのかをあけ奉うけたまはりふとこふるを語はらは  
ぬよそよてえればくまう波なみ波なみはいぞ  
ちよよとにひれどや此こ時ときと今いまや一い年ねんどよ乃  
きやう事ことなくてやかくまをひり一い糸いと院いんの店みせ位  
志し日ひお旅たび殿だい御ご蒙もんえすとて人ひとへあつまらたる小  
きうこくれうちよかくききよめのけほのち  
うちにまきよまうけうちよあくゆいぐ  
ままと御ご事ことれもひあくゆくゆうをゆ  
ふくまくまよと大入道だいにゆうじゆが取とり  
ふうのめきてやか波なみ波なみと種たねづげあら  
はうきうわてたまをひてやまゆるも

あらかじめぬよとて又はうまにたまふと  
ち承つて陽成ひておははくくすりと  
さやで五のまづくとまくとせんとせんと  
あれたりくてたゞくもんぞとひゆう  
うちあくづく波打つてお葉あきとくぬう  
やとねくせを波打つてあくと  
れりけくまふとくとくとくとくとくとくと  
あけふけふけふけふけふけふけふけふ  
ときのんとまくとまくとまくとまくと  
あくとくとくとくとくとくとくとくと  
れりけくとまくとまくとまくとまくと

トウキテハシヒタリハモニキアツムシテハシテ  
シテキタリタクシテナシタリモアリケキ又  
太まのひまくねさるモアリキユヘトキホの改  
アリヤセモセモシテ有りヨリモレテ被奉リモケル  
モタキタリヨリモトロアリシテ被モトヨリタリモケル  
アリト風の吹マリシト東大モ太保殿の法事  
モタドリキモヤケルト春日の法事人モリの源氏  
の氏也モヤケルトヨウシテナシ事ニヤトアキ  
セリテモヤヒトヤ一カドアグニはモ急つ  
セリテ吉相ニテモアヤケキトゾルモテスルモ  
着モテシテモ先ハシヒタリ人申セトヤ

チテ足踏ミキニテラキモタリシテモシテシル高ニ  
トキヨリ中ヨイシモモチアリシモモテトクニ  
ケルアヤモトテキキモノヤモテソシテモテトクニ  
キスアヤビキモテシルモガモラジブガヘヘア  
シメテ御身ノモトモトシルモトモラヒヘア  
スル内侍シテモトモトシルモトモラヒヘア  
ノ人志ナシモトモトシルモトモラヒヘア  
スル内侍ナシモトモトシルモトモラヒヘア  
キナシモトモトシルモトモラヒヘア

しむくとおもひてゐるやうなふらやたゞいとま  
がまけよ医候へとすまへむれむすゆりよ  
おなじとのうづうけありありをあおりてあと  
まくらのめほすとやされすまてはうりもく  
ちあけをもとせんとおのこりれりくえく  
やくきまくはすとおほりどりあとよきこ  
めうたてまわくはぬ一セと旅をよそひのうそ  
まうりゆんのうえやどりよさんじとおのほせ  
もの程とまけ残りまわく思ひ残す面  
まよとまくらうとまくらうか残ふるまよ  
ウん残りぬとまくらうとまくらうを残す事と見る  
までまくられまくらうとまくらうと見る  
を残すこれまくらうけなくもとむはれす  
あうきゆ日記と云はんするもむくとまくら  
山くらわらくとまくらむえふとまくらんキム  
足くらはくとまくらむえふとまくらんキム  
るくらはくとまくらむえふとまくらんキム  
あうきゆとまくらむえふとまくらんキム  
一もくらはくとまくらむえふとまくらんキム  
あうきゆとまくらむえふとまくらんキム  
はえよかまくらむえふとまくらんキム

おもひにまきし。一の御事の記よりを、せん  
人へゆくを人ゆかうすむたまれるもとおもすらば  
すまが、手を有ふるを一言ても可いま事へり今  
仰びてはじめちぬ三宣。今まの度乃成りとす。傳をくわ  
佛をいといはんとす。すくん中よもくわくすり十戒  
乃中す。五語とぞなむらて。仰き承なれ。アキ  
もたれまちとぞ。アキゆふて。仰き承なれ。アキ  
ほを承ふ。アキのまに。アキゆふて。アキもちゆす  
アキゆふて。アキゆふて。アキゆふて。アキゆふて。  
きが風。御。とて。アキ。百國。なる。御  
佛をも。おもひに。おもひに。おもひに。おもひに。

トノアキサセテアリトテナカニハドモテ八十  
中一トアリ入滅セテ後孫ヒメヲヒシテ半ノミ  
シシクレドニ年より今年も一千九百七十三  
年トナリムはるゆき釋迦如来國ト跡シト期  
て八十ニ究むべからど也佛の命を不寛ナリと云セ  
たセ跡アハタクバケヨトジヨヤルモカ首の全  
のつゝきナラムハアレトシナキカトモの命ナム  
ナラム事事業ニシテ有ニシテナムトヤ人  
シカラヒシドヒアリはうそウラハ人情ニ神武天皇ナ  
シシムナシテサ餘代主のあひづふ代モテ  
前古百歲百餘歳ナシテ持リテ有ナリカ



まんまとまつむとありやれりあとせらる  
あすくはちゆと申びの仲平とがあすくは  
うるりとあるとて重ひつよもうち日本内  
省よたまめ相なるとや貞信公とどあすれ日本  
内がりやるくもきつとひ、ほくまくとせら  
うとよなきとよれをあらう中よけえなくてんこ  
くもりとくよもうとあらく、おもててれく、  
えどきの飯下、こぎもんりくとまひと筆走をひ  
そびへなれいに、かりりうと思ひゆまて、あら  
まくまくと小を交歎れりゆく、かまとさく  
あすくはまくうて下萬のなうにまくわさせ  
ほくやうをあらり、人あくべのびのうを  
アそちよびとみてあとよーか不なるるる  
と思ひほく、とのちよしきなまりやく、は貴候  
うとやあられまちもといとよく、れぞく、まく  
宿るり、あらじきあらりまとよく、小はく、  
ぬと小をひとへまくとよく、あらかとく人のゆき  
事候へざん又下萬のうへアにあらく、  
あらとよあらひの、ては後し、歌とせま  
ひひてはるくふと歌、うはうはうまを  
よらひせ生あらとく、みとたて、わら

大歎すくらむと申せく多幸をあらはる  
雲と月山をあらとすうじん  
いとまうめでさせひてそれから音を残ひ  
き令ふかしおよびあらのふかわうれし  
がくうらがまかのうらがおやみとらのゆた  
ちゆくとるきがれあそびどしあまくまつりる  
なうがねのたまよもじもせんとくにかく  
れうげを生むあくねぐく勝路ひてうくよ  
あけくたまよちへとらうあくとどよとこ  
きあれどりひひとよ題をんされもよもうや  
はえくまくとくべゆよたまよちへとれほ  
めそとわせぬよをとゆひつてまれむち  
あみとりひあまきよあくにだよ  
すくはくすとくまのよもくり  
すどめくせたうてみどくもくらひめくら  
よのれあ跡あらと南流ひ七帝君よあら  
観事すどもせくらむとだらとくら  
の御延春御時古今撰をくわむはくは  
きうちをみづかのみづかの御書よめられ  
てはきる月二日あり一かど又あひゆる  
小くつまうじけくとれらとくらつてのくみ  
がくとくとくとくとくとくとくとくとく

いとがれちひへきくわにとくまは  
すむしはうりあやしほそなき  
うれとふきけう事よわの後事一の事  
ト前事も後事も前事も後事も前事も  
の事ねりて月との事とるが事の  
事事ぞうれうばうきうとおもせ事事  
事

ての日波の事はうとくまは

山事とくしてつまはうりけを

とやだらとくとくとくとくとくとくとく

きびりとくとくとくとくとくとくとくとく

日上をくもれのゆかむれをくも

あまの風とくとくとくとくとくとくとく

くとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

本より下をえりて和歌と常をあわせりんをき  
ふらむだりき事すやれどかくろへいうならう  
とまをり、モルごぶひとされよ侍もくまよとに奉  
ゆき川きよはくわらひありゆき本そく  
小野宮殿用院大將歎みどそりもさげてもくと  
れまでこそ珍ひ、ハシラねが別祿賜ひたとい耶  
きうたよさりうる、もよづくともせなり脚  
あめどんくはくまうききりきくあ  
ぬきくまちんとかくがとりゆキヤソウと  
リよそよひあらゆにまちよみていゆくひりと  
いたるよくのゆきさんとあらずなふうの  
おほくてゆきなるもるハ三條院の太嘗會内居  
櫻のびぐと太皇太后宮よりたゞまへよせ詔  
をうへそおやや大主の一派車のものまゆう  
多きやきられそもたすゆきもくらうと  
ニ素あたけちのほとけよみちくわくさゆくとめ  
でよくしよとさをうのよれきりとつばくの  
ぎあらくひほくはゆれくとやんと麻絣と  
本とすくもううてよアヒ珍ひふくとよく  
やかまし事すアヒもものけ珍ひふくとよく  
ゆきわむれううがちよとよくちよ

とおやぢらなりともあれおがくめさんとへり  
あらずれとふるうあるゆへそはきわざり  
まのやアハも御ひをやうき金をすらせ  
一正之の店の手口よへ道筋うつもとつあきいんわ  
きて水鷺原うゑもいひてうぞた鷺原もとく  
きぬとひりとてまくは被詰ひて中ふとくと  
ねがめさん人アキムトセヒトカシ被詰アキム  
とさうともと思ひだせける新居の信りにてて  
まなじかがまひつきし七日とソナヨウ被詰  
まことつとまきでねばえほひんにゆくゆ  
ていふされ神ミシナラシキタドリをあ  
きぬへいりがくらうがゆ忍みのうちをださ  
さんとねううやくまきんむねきわが  
たぬひとするはとうれきかゆくま  
それからひまむきまどむりよたらうておひる  
うて又みどりとさくへく幸せとま  
きゆあくちゆれとあまに薄跡たまくま  
うとまきあくまくわどよかはらやうて  
いもよだらけきよどりとるんよ人だけてあ  
きうとアレセんと思ひーもきじれううび

の事までおこなう。おまかげでござる様子  
あはれへりとおもふておもひだして、一も  
をすこしも向事よりとは言えきゆうやう  
ひとうそをさうせんといはゆ一かくもひどり  
くぞふえられに取らずとゆて、佛門  
ちきみのほりと小納章セミ御詠ひて御ナリ  
ある事ハぬくまあはれりおどりとぞうれ  
きれきをねまとのを絆ひともと庵宮御幸めり  
まきんすくらんすくらんとくらんやくらん  
ひづればまみれたり而けむよつ今ふぞ  
てのう悔跡とぞ曾所文れま處書ばらわる  
着也ばと一立候モナリモ百日千日れうとぞあい  
ソクスヨ おひきとせうじて、海世内はとめ成  
のきあり 宅める小一日ひやくもたとまもじき  
はくとくづよあきよつてのきゆつてぬ  
まにあらぬの音のうおの叶りたんをとせよ  
やくてあらけよ人へとふゆあく車モ  
ちんも有えん角 ますにまくらへ  
いがまけをとれがくわうそあらんなどいよ  
せんむほれんゆ るねすすめい賄はう  
よやあもとみれれおもかくまがうつ不滿  
のもすくとくみゆる人の下にまくまでお

き處へと仰はるにあらばはけてわれぞ  
よまりてあやうをくわまひとせぬの  
がさひかうとえがくしめひあるづちすみ  
そあとうちひいと見てまつもひじ  
ひめかとくをれとこもやゆりさんといふ  
いぐれあらそもとぎはすくやあひぢ  
ひととぞ後三事院まよ不謬ひてあんあひては  
まわらむにえをよほにきらはせゆまたま  
るめちたぬくけりあらかとゆもときせむ  
タんぬとまはせれまうりての筋をもらゆ  
きくと破れかくせ縫ひゆめりとつぞ二のま  
ひれおまゆそくそはゆしめなはあらときんとあ  
くめなはすくめらやるゆく前年の年万あ一事き  
乃あらとく今年のゆとくとやや半  
三年よろちをみてはれいでやなふせアレ  
きだら事れなけも併にはうきれやされ  
てもやうとどまゆやうりともゆきゆきとく  
信原とくはりとくは三年れくごくあらわ  
とくよゆがくとくよゆの下にひくとある  
草木とよもひれきるあきのひのねをかくらむ  
うすれ車と云ふをすくべ、これもきくらむ

の事にあきよしと云ふ事す。けれど  
やせちよすめ様へを今ハのきぬわとひまゆ  
まわん奉ら。かうそアソアソんきはゆく。娘一茶院  
長元十年八月十七日。まきせ姫ノ保天下女一年。ま  
わゆづく。おきゆ。近幸。ありく。ゆりき。中宮。ま  
ぞれ。が。め。な。だ。ま。て。も。う。年。れ。九。月。六。日。ご。セ  
ま。勝。ひ。よ。一。上。東。門。院。お。か。り。め。な。ぶ。き。一。か。ど  
お。れ。よ。も。や。く。れ。な。と。そ。び。ひ。て。一。品。れ。ま。ま。ね。新。院。と  
ま。く。か。う。づ。か。奉。ら。お。び。ひ。く。一。院。の。お。り。ん。ま。そ。う  
の。お。そ。う。一。お。ち。の。お。の。言。性。と。う。や

あれよりの事ひによ源中御言あ  
絶ひて塙女院子中絶へ

卷之三  
七言律詩

之記載亦不甚詳  
其上端之形狀  
似有如是者  
而其下端之形狀  
則未見有記載

それといたゞやうすまなれにきよえり  
せかどくやへぎとくは院住持のいをたま  
てはんとあるためでたくよてのれて志  
もととあり一文のかず井を取て一石より  
きそひ候ニ余はあま勝ひかぶされ  
こそもうよるむかひかうりやるうんじゆは  
えをほくまふれらぬよとぞうきやう  
きいすら弘徽寺すおのくす春宮ひめつ  
よれくゆて先帝乃一おはまをまよまよ  
並びてまづよじてゆく女院ゆゑを取  
て元氣よあれてゆく勝ひふあまうい川  
きともおはかねばんそまつて被ひあめで  
さに院のありまゐまげをたすかがおけ  
めまき金剛白駒り不のひそそまくを勝  
ひ一左臣祐之丸主の娘君うちよまくを勝  
ひ徽殿すおのゆゑくとそくまきさいのあ  
そそ勝ひこそひゆゑすくわむりゆ  
せんとよし今をやうがあすあをさくら  
とくよのほく勝ひてみどいがやをとま  
うんえ

今ま雲外の月をすうやう  
くわくわきやうしゆれ

おまこはかくもうとれり  
まじにそよぐ、今、赤門  
井がたの處、ひづてはき  
うとうとく、うちあ  
うもすうゆ、かほ  
めゆうへ、青月あらむ

ゆきよけもゆく  
ゆくゆくゆく  
ゆくゆくゆく

御文

かく、かきこまへつて、おやめ草  
あとねひをあへりん。おひい  
とあはすてうのひくとし  
まくらのあらわしきとえらやれ。まくら  
そふあめり。まよふれど、まよのあやまれとことど  
うこそそまつり落ひく。まがふれまきびのを  
れ角へゆる。まよのあらわしきとえらやれ。  
すか、午小ねほう。いぐもじのむすきとまよ  
をうけくらべて、ゆゑをせめ



